

オリンピックは平和の競技
東京 2020
2021年

「έκεχειρία」すなわち 停戦：「オリンピック競技の魂は、諸民族間の争いをやめ、皆で平和を享受すること」。

オリンピック競技の母たる国ギリシャの本来の伝統を受け継いで、東京で開かれるオリンピック（2020・21）は「平和の時」であることを願い、全世界に及ぶ停戦運動を進めてまいりました。選手や観客の安全は言うまでもなく、オリンピック競技の本来の聖性を守るためです。

残念ながら時の流れとともに、平和の聖性が第二義的な問題にされ、もはや国際オリンピック幹部はその不可欠さを重視しなくなりました。その流れに反して、平和の回復を目指すことこそオリンピック競技の精神であるべきというのが私たちの結論であり、願望と確信であってやみません。事実、現在戦端を開いている国家は三十を越えています。オリンピック競技場にはためく国旗の中には孤独と苦悩に泣く国旗もあるに違いありません。オリンピックに携わる国家の数は国連の参加国数より多いのであり、もし皆が揃って停戦の可能性を訴えるなら、それは如何に意義深い証言となることでしょうか。

2008年に開催された北京オリンピックの場合は、中国政府の拒否のために停戦の訴えが一切できませんでしたが、今回の東京オリンピックでは、せめて二十日間の開催期間中は世界中の戦争が停止されるようにと努めましょう。僅か二十日間の平和の回復が恒久平和を垣間見る機会となり、そしてそこに至る第一歩になりますように。1972年にバイエルン州ミュヘンで開かれたオリンピックの選手村で幾人かのイスラエル選手たちが暗殺されたあの思いがけない事件を思い出せば、如何に平和の心構えがオリンピックにとってかけがえのない問いかけであるのかがわかります。

停戦の必要性

2012年にロンドンで開かれたオリンピックには停戦運動がめでたく実を結びました。金メダル選手、ユリ・ケキをはじめ、多くの選手や観客が行列を作って停戦運動の署名に参加してくれたことです。競技場の上空を飛ぶ自転車の風景がテレビで放映されたあの瞬間の感動は何とも言えない程でした。あの自転車の翼が、2008年に誕生した私たちの「PedAllamo Insieme」法人のシンボルマークの翼とそっくりで、2012年のオリンピックの成功を予告する兆しとして感じられたからです。

2013年8月、パパフランシスコがリオデジャネイロのカトリック青年大会の場で世界から集まった多数の若者たちに述べられた言葉の中に、特に感銘を受けた一言があります。その夥しい数の若者の群れの中では、「PedAllamo Insieme」法人の私たちはちっぽけな一グループにしかなりませんが、深く感動したのです。市役所のバルコニーから、パパフランシスコが3年後に開かれる予定のオリンピックの旗を手にもって接吻しながら、昔のギリシャのオリンピックの聖なる魂を呼び覚まして、各時代のオリンピックにおいて優先されるべき願いは平和であると断言なさいました。

その強い言葉に励まされた私たちには、パパフランシスコこそがオリンピックの本当の聖火ランナーに見えてきました。小さな国の指導者であることも考えれば、私たちにとってはパパフランシスコこそが真の“聖火ランナー”に見えたのです。

2012年のロンドンオリンピックの際、私たちはナポリターノ伊大統領（当時）から激励の心強いお言葉をいただいたことがありましたが、リオデジャネイロの青年大会の場におけるパパフランシスコが私たちに委ねられた平和への叫びはいっそう深い印象を与えてくれました。「オリンピック競技は全停戦の好機であり、平和の復帰を訴える“恵みの時（カイロス）”である」。パパフランシスコはそう訴えられたのです。その叫びに打たれた青年たちは一斉に平和の復帰のために挺身したい覚悟を叫び応えたのです。添付の写真はブラジル・オリンピックより僅か一か月前にポーランドのクラクフで催されたカトリック全世界の青年大会で撮られた写真です。世界の若者は全員が平和を促進する主人公！周りに笑顔を振りまきながら停戦運動に恭しく署名する若者の行列！若者の行列に加わったブレガンティーニ神父やパパフランシスコのスポークスマン、ロンバルディ神父、そしてバニャスコ枢機卿などが、調和とスポーツと平和の偉大なる証人だったポーランド出身のヨハネパウロ二世の遺志を汲んで署名なされたのです。さらに、「平和の年」と指定された2016年には、私の教え子たちをはじめ多くの学生や教員や一般の社会人が、さらに国内外の政治家や宗教家も加わり、多数の人々が署名に参加したのです。

2013年のリオデジャネイロ大会の際、多くの選手が信念をもって停戦運動に賛同しました。印象的だったのは、ギリシャ選手団の弾んだ賛同でした。彼らにとって、自国の祖先が大事にしていた伝統を尊び署名することは愛国心からの清らかな自負でもあったのです。南イタリアに住む私にもギリシャの自尊心の一端が息づいています。といいますのも、オリンピック競技が誕生した時代、イタリア南部はギリシャの植民地「マグナ・グラエキア」であったからです。つまり、イタリア南部の私のような者にこそ、オリンピックにおける停戦運動を訴える使命があるのだと思うのです。「マグナ・グラエキア」の子孫として、母国ギリシャの哲学や民主主義やオリンピック競技に敬意を表して。

ヨーロッパの諸国民の間には何十年もの間に平和の絆が深まり、欧州連合として2012年の「ノーベル平和賞」を受けました。パパフランシスコの言葉に従い、全世界に及ぶオリンピックの祭典の成功は庶民たる私たちの成し遂げるべき大切な役割にかかっているのです。「子供に立ち返らなければ……」とイエスも論してくださいました。それは、オリンピック競技の国際幹部が不可能と諦めてしまった「オリンピックの停戦」という旗を掲揚することです。オリンピックには美しい魂が潜んでいて、オリンピック・パラリンピックの選手に限らず、多くの少年や青年の美にたいする憧れを目覚めさせてくれます。2019年にパナマで世界の少年・青年に関する研修会が催されました。いっぼうからイタリアとヨーロッパの青年たち、もういっぼうから地元ラテン・アメリカの青年たちがともに集い、青年同士が次年に開かれる予定の東京オリンピックについての見解を交わすいい機会となりました。実現したい一つの夢を打ち明けさせていただきます。それは、夏期休暇の2日間を来るオリンピックに捧げたいという夢です。8月6日は広島市で開催される平和記念式典に参列する予定です。パパフランシスコの祝福とともに出発することが出来れば幸いと祈っております。「マリア・カルメラよ、平和の炎を燃やせ！」と激励してくださいるに違いないと思います。原爆の炎によって潰された広島に平和の炎をもたらすとは、何とも言えない皮肉ですね！

敢えて、密かに抱えているもう一つの夢を申し上げさせていただきます。来る7月25日に、カトリック系の聖心女子大学卒の美智子上皇后からその孫でおられる敬宮愛子内親王に平和のトロフィーとしてオリーブ油の器を賜っていただくことです。オリンピックの選手たちが「平和の祭典」を始める前に我身に塗るオリーブ油です。オリーブ油は体に強さと優しさを注ぐ大自然の恵みです。優しい敬宮愛子内親王の天皇時代を待ち、祈りながら……。

Maria Carmela Dibattista
マリア カルメラ デイバッティスタ